

発掘調査報告第27集

市道入口町線道路改修工事緊急発掘調査報告書

赤 須 城 跡

(第2次調査)

1989.3

駒ヶ根市教育委員会

例 言

- 1 本報告書は市道入口町線道路改良工事に伴うもので、赤須城跡の調査としては、昭和54年度の県営ほ場整備事業に次ぐ、第2次調査となる。調査は道路工事との関連から、昭和62・63年度に行われたものである。
- 2 本調査は市の委託を受け、駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が実施した。
- 3 遺構及び遺物の実測図作成及びトレースは気賀沢進が行った。
- 4 遺構の写真撮影は気賀沢が、遺物については木下平八郎があたった。
- 5 実測図の縮尺は各図に示してある。水糸レベルはすべて620.00mに統一してある。
- 6 本書に使用した赤須城測量図は、県営ほ場整備事業実施以前（昭和49～50年度）に市立博物館において作成したものを縮尺したものである。
- 7 本書の執筆は、第Ⅳ章第3節は木下が他を気賀沢が執筆した。
- 8 本調査にかかわる資料は、市立博物館に保管している。

目 次

例 言

巻頭図版

目 次

第 I 章 発掘調査の経緯

第 1 節 発掘調査に至るまでの経過…………… 1

第 2 節 発掘調査経過…………… 1

第 II 章 遺跡の環境

第 1 節 遺跡の位置及び地形・地質…………… 2

第 2 節 歴史的環境…………… 2

第 III 章 赤須城の概況…………… 3

第 IV 章 発掘調査

第 1 節 概 要…………… 4

第 2 節 遺 構…………… 4

第 3 節 遺 物…………… 5

図 版

卷頭図版 1



中国製陶磁器



天目茶碗

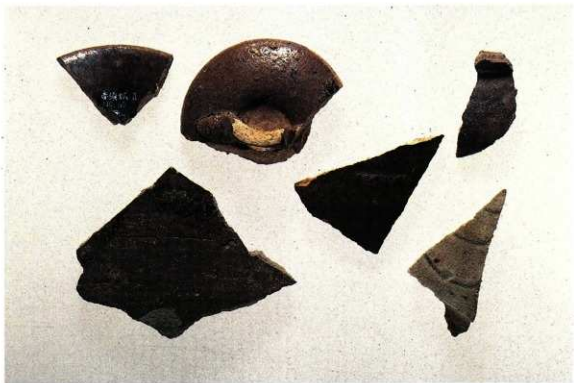


左の高台

卷頭図版2

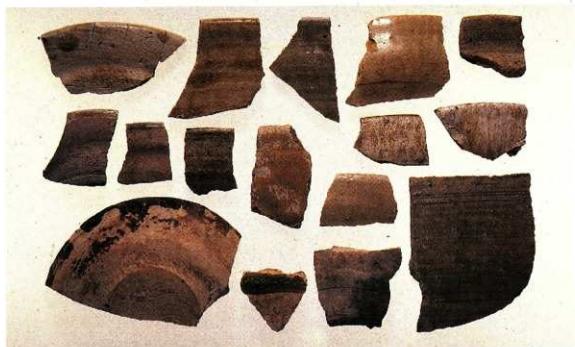


瀬戸・美濃、天目茶碗片



瀬戸・美濃、陶器片

卷頭図版3



瀬戸・美濃、灰釉陶器片



常滑大壺片

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

赤須城跡は群内でも有数な規模を持つ城跡として、昭和52年度に市の史跡として、主体部が指定されている。

この中を堀を利用して、市道入口町線が通っている。この道路は昭和20年代後半に開けられたもので狭く又南側は段丘崖を通るため、崩落も多く危険なため、地元より道路改良の要望が市当局に出されていた。その崩落は一部土塁にも及んでおり放置できない状態となったため、市建設課では、道路改良に踏み切ることとし、教育委員会に協議を求めてきた。

工事概要は、第3図に示す第Ⅰ地区（外城）と第Ⅱ地区（本郭）の間から第Ⅱ地区の南側を拡張するというもので、土塁が破壊されるというものであった。

教育委員会は、市指定の史跡であり、通称本郭と呼ばれる箇所工事であるため、工事に当たっては、土塁に影響を及ぼさない設計変更を迫ったが、崩落がすでに土塁の一部に及び、オーバーハング状になっている現状から計画変更は難しいとの回答であった。

これを受けて、教育委員会では市文化財審議会を2回にわたり聞き協議を行った結果、現状変更も止むなしとの結論に至り記録保存の調査を実施することとした。

第2節 発掘調査経過

発掘調査は調査範囲が狭く土の置き場や交通上の問題もあるため、工事に併せて行うこととし昭和62年・63年度に実施した。調査は駒ヶ根市埋蔵文化財発掘調査会が市の委託を受けて行い、調査団長には友野良一氏をお願いし、調査主任は市立博物館気賀沢進があたり、調査員には、木下平八郎、小町谷元の両氏をお願いした。

調査経過は次のとおりである。

昭和63年1月8日から1月22日まで62年度の発掘調査を、平成元年1月9日から11日の3日間昭和63年度の発掘調査を実施し、その後遺物整理、報告書作成を行った。

第II章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置及び地形・地質 (第1・3図)

赤須城跡は、駒ヶ根市下平500番地代に所在する。天竜川の右岸河岸段丘上突端にあり、JR駒ヶ根駅より東南東2kmの所に位置する。標高は620~30mである。

伊那谷は、木曾山脈と赤石山脈とに囲まれ、その中央を諏訪湖より天竜川が南下し河岸段丘を形成している。両山脈から天竜川に注がれる大小の河川により田切地形が造られている。

赤須城の南は南沢川の浸蝕による自然の堀、西側・北側は平担地となっている。東側、天竜川湿地帯とは60~70mの比高差を測り、自然の地形を巧みに利用している。

遺跡の地質基盤は伊那礫層からなり、その上に新期ロームが堆積している。

第2節 歴史的環境 (第2図)

上伊那地方には、数多くの城塞遺構が残っているが本格的な調査も少なく、不明確な部分が多い。駒ヶ根市においても、狼煙台・物見台であったとされるものを含め現在までに28箇所が存在が知られているが、その性格がはっきりしないものが多い。

赤須城の付近には遺跡が少なく、宮沢川を挟んだ対岸丘上に小鍛冶古墳群、その西方に奈良・平安時代の御射山遺跡が知られるのみである。

赤須城の北方田沢川の南岸段丘上には赤須氏の家臣、田沢左近の居館があったと伝えられ、その南東には「寺屋敷」なる地名があり、焼失前の長春寺跡と推測されている。「上伊那郡史」によれば、「長春寺は、南北朝時代に城主赤須氏が俊淵を請うて開基とし、城の別名東光城と赤須孫三郎長春の二字を各々として東光山長春寺とした。」と記されている。天正10年の織田氏の伊那攻略の折、焼失した後、現在の地(段丘下)に中興したと伝えられている。天台宗延暦寺の末寺である。

赤須城跡の東北に「梅ノ木」と呼ばれる所があり、赤須氏の武将梅ノ木左衛門尉の居館の跡と伝えられている。

赤須城・赤須氏の歴史については、「上伊那郡誌(歴史編)」によれば、「歴応中(1338~1341)片桐氏の分流、孫三郎が幸ここに居を構え赤須氏を号す。天正10年織田勢侵入の時、大島に戦って家名を失う。」とある。また「信陽城主得替記」によれば、元久2年(1205)片切正綱の三男孫三郎正則が、赤須郷に分地して五百貫文を領し、所在地名をとって赤須氏を名のった。」とあり、定かとはなっていない。永仁2年(1294)赤須氏兄弟が領地を争って鎌倉幕府に訴訟した記録もみられ、鎌倉時代には、赤須氏が存在が知られる。

後述するような広大な縄張を有す赤須城の成立がいつ始まるのか、除々に拡大したものと考えられるがこれらに関してはまったく不明である。

第Ⅲ章 赤須城の概況 (第3～5図)

赤須城は伊那谷特有な河岸段丘を利用した連郭式の平山城である。南側は宮沢川の自然の堀東側は急峻な段丘崖となっている。城郭の基模は東西600m、東に行くに従い狭くなる。

この城の縄張りには南北に走る8本の空堀によってなされる。一番西の八の堀(H8)は困地造成に伴い、確認されたもので北側は東に伸びて段丘崖に達している。この付近一帯は通称伴城平(番匠平)と呼ばれる所である。東に続く7本の堀は現在もその堀形を認めることができる。六の堀(H6)は昭和54年の発掘調査において小宮沢川まで続いていたことが確認されたが、七・八の堀については確認できなかった。

8本の堀によって縄張された郭は、段丘の突端に「外城」(第3図-I)、「本郭」(II)、「二の郭」(III)、「出郭」(IV)、「添郭」(VI)と研究者によって便宜上呼びならわされてきている。ここでは、この区分に従って説明をしていくこととする。

城跡の北面斜面にはわずかながら帯郭の痕跡が認められる。また「外城」から南東に伸びる尾根上にも3箇所にそれらしき痕跡がある。

「外城」は三角状の平面形を持ち、土塁はみられない。「本郭」との間には一の堀があり、「二の郭」・「本郭」を縦断する市道入口町線が堀底を利用して通っている。「本郭」は南北60m、東西50mの矩形を呈し、北側を除き幅2～5mの土塁が残る。西側ほど厚みがみられる。土塁の内側さらに北側に浅い溝がみられるが、これは一時堀として利用したときの根切溝であり、城とは関係ないものである。

「二の郭」は堀(二・三の堀)によって南北に細長く区切られ西から北にかけて土塁がめぐらされている。その西の出郭は幅狭く北側は現在耕作地となって四の堀は埋めたてられている。南側は特に手を加えた跡はみられない。「出郭」の東、三の堀を下れば「長春寺」の裏に出る。西の四の堀は段丘下の「入口部落」に通じる堀底道で、現市道開通以前の重要な生活道路であった。

「添郭」は北東が段丘面に接し、南の面を削りとして幅の広い土塁を西から北に造られている。この方法は伊那の諸城に多く見られるものである。市道を狭んだ南側「出郭」の西側は「室」(V)と呼ばれ、中世の陶器片が多く出土する処から武家屋敷の跡ではないかと考えられている。この西側には、四の堀底道に通じており、南側は平坦で畑地となっている。北側はややくぼく現在水田となっている。添郭の西側は自然地形を堀で区切るのみである。名称として「茶の城」(VII)、青城(VIII)、伴城平(IX)が残っている。

「室」の西を流れる井は「とよ口」にて直角に曲げられ、西から引水されており、現在も農業用水として利用されている。

昭和54年県営ほ場整備事業に伴い「城上井」の南側を発掘調査したところ現在の縦道下が3m程の舟底状の堀状遺構であることがわかり「室」の縦道も同様と考えられる。この縦堀内部からは室町時代から江戸時代の陶磁器が発見されている。砂の堆積は少なく、道路の跡が水路かは断定できなかったが、後世の開田にあたり井の動いた可能性もあり、この縦堀が古い「城上井」で

あったことが十分考えられる。

この縦堀に直交するように六の堀が確認されている。六の堀の西方よりいずれも中世の住居址1軒、小竪穴11基、柱穴址5基が確認されている。また六の堀と五の堀の間からは、やはり中世の柱穴址6基、小竪穴9基さらに平安時代末の住居址一基が検出されている。

中世陶器は室町時代のものが最も古いもので、鎌倉時代のものはみられなかった。

赤須城付近の字名についてふれておくことにする。郭一帯はすべて「小城」となっており、その西北に「伴城平」がある。郭の北東斜面は「小屋」その東は「小屋前」、南東斜面は「入口」と城に関連する地名が残っている。さらに「馬ぶち」「古屋敷」といった地名もみられる。先に述べた「室」「とよ口」「茶ノ城」「青城」といった名は字名としては残らず「小城」で一括されている。

第Ⅳ章 発掘調査

第Ⅰ節 概要 (第5・6図)

本調査は市道の拡張に伴うもので範囲が狭いため、グリットは特に設定しなかった。東側は土塁内部のため全面発掘を行い、南東から南にかけては断面調査を行った。

ここで土塁に係る層序についてふれることとする。

土層観察用断面は4本設定した。土塁南西部に設定したA-Bをみると、土塁は一担ローム層を削りロームブロックを主体とした黄褐色土を盛り造っていると、内部も表土下には漸移層がみられず、ローム層に至っている。郭造成に伴う削平の結果と考えられる。

郭の東側の3本の断面にはいずれも明らかな埋土の痕跡が認められた。埋土は南東に行くほど厚くなっており、I-Jにおいては、土塁下にロームブロック(焼土・灰を含む)を含んだ暗褐色土が互層をなしている。埋土中にみられる焼土・灰の存在、埋土下の遺構の存在は明らかに郭が拡張されたことを物語っている。

第Ⅱ節 遺構 (第7・8図)

調査面積が狭いため、まとまった遺構は確認されていない。遺構は柱穴痕と5段のテラス状遺構である。説明上土塁内側よりI・II・III・IV・V面とする。

先に述べた埋土はII～V面に認められ、遺構はその下部に検出された。I面に埋土がみられないことから当初の郭の東限界と思われる。II～V面とI面の遺構との関連性があるのか、時期が異なるのかは、今回の調査では判断できなかった。

I面中央部に焼土を伴う小ピットがある。その南に幅35cmほどの浅い溝がある。

II面は4.5～3.5mの幅を持ちI面との差は20cmである。III面は5.5～6.0mの幅で南東にやや傾斜している。

Ⅳ面は東は幅広く西は狭くなり、南にかなり傾いておりⅢ面との差は60cmを測る。中央部に柱穴が直線状に並び、その北に浅い焼土を持つピットがみられる。(気賀沢)

第3節 遺物 (第9・10図)

1 陶磁器類

①中国陶磁 今回の調査では、中国陶磁の出土は少ない。そのうち青磁(10外)は、全部小破片で、器型復元のできるものはない。器型は、鉢2、碗3、皿1、の計6点で、碗の小破片に細い線状の紋様があるものが1片あり、蓮弁文の末端部分とおもわれるものであることから15～16世紀のものであろう。他の5片は、青磁釉のみで、時期決定はむずかしいが、全国的に出土例の多い、13～14世紀のものであろう。

白磁(51・60)は、器型の口縁部分が復元できるものが1片ある。口径12cmで、高台部分が失なわれているので、器高、高台の型状を伺い知ることはできない。底部外面周辺を除き全面に施釉されており漬け掛けで、釉際に釉が垂れて滴状となる。他に細破片で、腰の部分とおもわれるものが2点ある。

天目茶碗(59) 高台から胴部にかけての破片で、高台周辺を除き全面に厚く施釉されており、高台は露胎で、径は3.5cm、高さ0.5cmである。釉調も美しく一見して中国産と分かる優品である。他に壺(38)の一部分とおもわれる小片が1片あるが、胎土よりみて中国産とおもわれる。今回の調査で中国陶磁は計10点が出土している。

②美濃、瀬戸系天目茶碗 は計18点出土したが器型を復元できるものはない。口縁部9点、胴部4点、高台周辺が露胎となるもの3点、鉄化粧を施すものが2点ある。高台部分の出土はない。

③壺(92) 合子の壺で、つまみの下部と、蓋の上面つまみの下中心部を除いて鉄釉が塗られ下面は無釉である。径5.2cm蓋裏中心部に径2.2cm、高さ0.5cmの突起があり糸切痕が残る。伊那谷では数少ない出土品である。

④鉄釉小杯(60) 口縁部外縁と、内面に鉄釉が掛けられ、口縁下より底部は露胎である。高さ1cm、口径6cm前後となる。他に、鉄釉を施したものが3片あり、四耳壺の胴下半部とおもわれる破片が1片ある(100)。

⑤灰釉としては碗、皿、鉢、瓶がある。いずれも少破片で、器型復元できるものは1片(124)のみである。口縁部の灰釉が施される糸切底の丸皿で、高さ2.6cm、口径10.5cm、底径5cmで、口縁部内側に1cm前後の幅で、淡緑色の灰釉が施されている。102は壺か瓶の胴部の小破片で、灰白色の胎土に淡緑色の灰釉がうすくきれいに施釉されており、篋状工具で描かれた細い線が弧状に3本認められる。

⑥常滑系大壺(90外) いずれも大壺の肩部から底部近くの破片で、器型復元できるものはない。色調は茶褐色を呈し、肩部とおもわれる破片に自然釉がかかっている。163は左側が欠損しているので全体像を伺うことはむずかしいが、沈線で描かれており、内側面に調整時の指痕

が強く残る(163)。淡い黄褐色の底部から立上り部分の破片(84)がある。焼成が甘く軟質に焼き上っており別個体であり、器厚は1cm前後、底部付近で2.5cmを測る。

⑦槽鉢(8外) 量的に以外と少なく、器型復元できるものはない。鉄釉が全面に施され、色調は黒褐色の二通りがあり、内側面に底部より七条の襷目を引き、おろし目としている。口縁部の小破片が一片あり、底部の出土はない。

⑧土師質土器—内耳鍋(42外) 小破片で器型復元できるものはない。口縁部1片、他は胴部から底部にかけてのもので20片出土している。器壁外面に煤の付着がみられ、黒褐色を呈するものと黄褐色の二通りがあり、器厚は、口縁下で0.5cm、胴部で0.8cm前後、底部付近で1cmある。

⑨土師質土器—杯(9外) 赤褐色を呈するものが大半で、灰白色のものが少しあり、復元できるものはない。底部の径が9cm位となるものが一片あり、糸切底である。

他に時期不明のもの少しと江戸期とおもわれる燈明皿がある。

2 鉄器類

鉄器5点、青銅品2点、鉄滓4点が出土している。

110は刀子で2箇所折れ曲がっている。74・86は角釘、他の2点は小さくはっきりしないが、多分釘と思われる。青銅品(71・101)は共に止め金具である。

3 石器

こもで石8点と砥石3点が出土している。こもで石の内116は顕著な研磨痕が認められる。93は一端に敲打痕がみられる。116は硬砂岩、93は緑色岩である。砥石はすべて小形の砥石である。

赤須城の遺物については、他の伊那谷の城館跡との関係もあり多くの問題をもつものである。報告書作成に時間的制約があり、十分検討することができず、研究不足もあり不明な点、誤りも多くあると思われる。この報告書では資料提供をしたにとどめ、大方の御教示をお願い申し上げます次第である。

(木下)

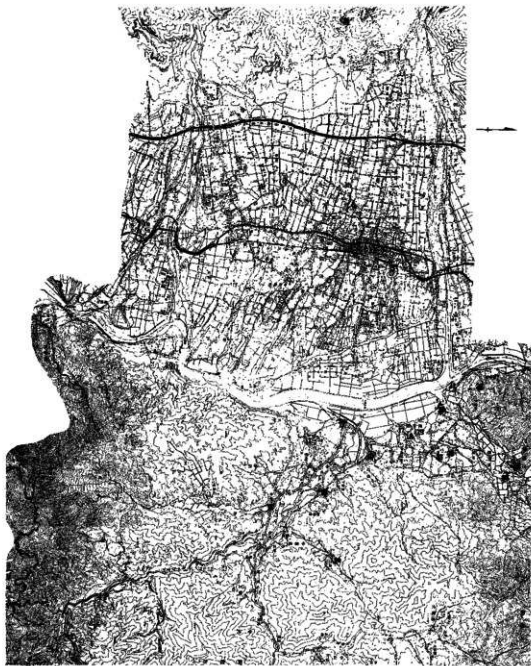
出土遺物一覽表

番号	器種	産地	釉薬	時代		番号	器種	産地	釉薬	時代	
59	天目茶碗	中 国	鉄 釉	中国15世紀	焼成良好	表採	碗	瀬戸、美濃	灰 釉	15 世紀	口 縁
			高台周辺を除き全灰、高台は露胎			1	折縁深皿	"	"	15 世紀	"
51	皿、白磁	"	高台周辺は露胎	"		3	皿	"	"	16 世紀	高台、露
60	"	"	"	"	小破片	6	碗	"	"	15 世紀	
10	青磁碗	"	青 磁 釉	"	"	19	皿	"	"	"	
76	"	"	"	13~14世紀	"	26	"	"	"	"	
118	" 鉢	"	"	"	胴 部	27	"	"	"	"	
145	"	"	"	"	"	31	"	"	"	"	
166	" 皿 ?	"	"	"	口 縁 部	40	"	"	"	"	
167	" 碗	"	"	"	胴 部	46	盤 ?	"	"	"	口 縁
38	不 明	" ?	鉄 釉 ?	不 明	小破片	49	緑釉皿	"	"	"	
2	天目茶碗	瀬戸、美濃	鉄釉、高白周辺鉄化粧	15 世紀	"	50	壺	"	"	"	胴 部
5	"	"	鉄 釉	"	胴部小破片	54	鉢	"	"	"	高台周辺露
17	"	"	"	"	"	61	"	"	"	"	
21	"	"	*高台周辺露胎	"	裏蓋破片	72	緑釉皿	"	"	"	
33	"	"	*高台周辺鉄化粧	"	"	73	"	"	"	"	
54	"	"	鉄 釉	"	口縁部片	75	皿	"	"	"	
64	"	"	"	"	口 縁、胴 部 片	77	鉢	"	"	"	
81	"	"	"	"	"	89	皿	"	"	"	
83	"	"	"	"	口 縁 部	96	盤	"	"	"	
91	"	"	"	"	口縁、胴部	102	壺 ?	瀬 戸	"	14 世紀	陶 花 文
109	"	"	"	"	口 縁 部	109	"	"	"	15 世紀	
126	"	"	"	"	胴 部	119	緑釉皿	"	"	"	
130	"	"	"	"	" 小片	95	鉢	"	"	"	高台周辺露
132	"	"	"	"	"	124	緑釉皿	"	"	"	胎
139	"	"	"	"	口縁、胴部	128	"	"	"	"	
142	"	"	"	"	"	131	鉢	"	"	"	口 縁 部
143	"	"	"	"	"	136	盤	"	"	"	
92	蓋	瀬 戸	*上 白	15世紀後葉		141	緑釉皿	"	"	"	
60	小型杯	"	*高脚部露胎	15 世紀	口縁、胴	150	皿	"	"	"	
98	碗	"	"	"	胴 部	169	碗	"	"	"	
168	水滴 ?	"	"	"	胴、口縁立上り	表採	"	"	"	"	
100	表	"	*腰部鉄化粧	15~16世紀	胴下半部	107	壺	"	" 不 良	"	肩、胴部
						144	底部糸切	"	*灰釉付着	"	

番号	器種	産地	軸素	時代		番号	器種	産地	軸素	時代		
7	底、未切	不明	無	軸	不明	165	大 壺	常 清	無	軸	15 世紀	
4	陶	瀬戸?	灰	軸	江 戸	45	滑 鉢	瀬戸系	鉄	軸	16 世紀	銅部節目
24	不明	"	"	"	大 窯?	120	"	"	"	"	"	"
41	小壺?	万 古			江 戸	127	"	"	"	"	"	"
63	說明皿	瀬戸	白	軸	"	42	土師製土器 内耳輪		無	軸	16 世紀?	銅 部
115	壺	"?	外鉄軸不良	不	不明	103	"	"	"	"	"	"
134	"	"?	内 無 軸	"	"	105	"	"	"	"	"	"
148	"	"?	3点同一體休	"	"	117	"	"	"	"	"	"
90	大壺?	常 清	自 然 物	15 世 紀	銅 部	121	"	"	"	"	"	"
97	"	"	無	軸	"	122	"	"	"	"	"	"
125	"	"	"	"	銅 部	123	"	"	"	"	"	"
133	"	"	"	"	"	155	"	"	"	"	"	口縁部
136	"	"	"	"	"	161	"	"	"	"	"	底 部
140	"	"	"	"	"	163	"	"	"	"	"	銅 部
143	"	"	"	"	"	164	"	"	"	"	"	底面立上?
153	"	"	"	"	"	表探	杯(脚取)					底面未切
154	"	"	"	"	"	9	杯(*)					銅 部
156	"	"	"	"	"	57・70・76・79・94・98・119・						口 縁 部
158	"	"	"	"	"	13・20・21・44・47・52・53・55・62・65・67・						底面未切
159	"	"	"	"	銅 部	70・72・76・						"
162	"	"	"	"	銅 部	79・94・96・101・113・117・119・						"
163	"	"	"	"	(底印?)	71	止金具					銅製品
84	"	"	"(燒成不良)	"	底 部	101	"					"
14	"	"	"	"	頸 部	16	不明					鉄製品
25	"	"	"	"	銅 部	74	釘					"
34	"	"	"(燒成不良)	"	"	82	不明					"
99	"	"	"()	"	"	86	釘					"
112	"	"	"()	"	"	110	刀 子					"
115	"	"	"()	"	"							
8	滑 鉢	瀬戸系	鉄	軸	16 世 紀	"						
12	"	"	"	"	口 縁 部	36	石 臼					残 欠
15	"	"	"	"	銅 部	表探	砥 石					
24	"	"	"	"	"	11	"					
43	"	"	"	"	"	130	"					
表探	大 壺	常 清	無	軸	15 世 紀							

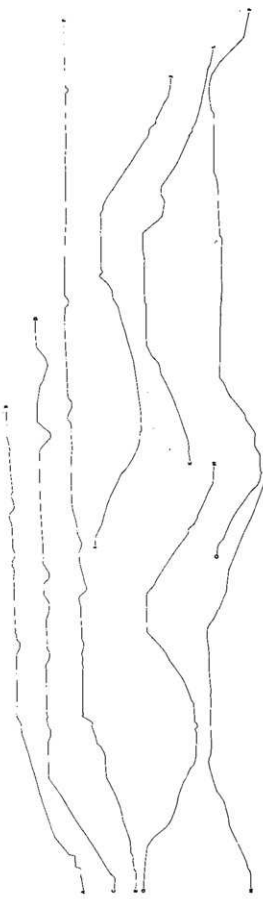


第1图 赤须城位置图 (S = 1:20,000)

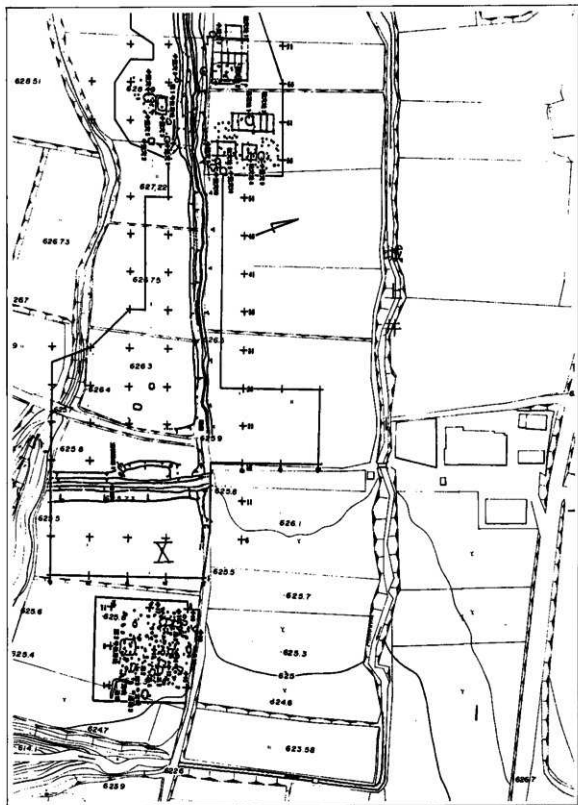


第2図 赤須城跡と市内の城址 (S = 1 : 75,000)

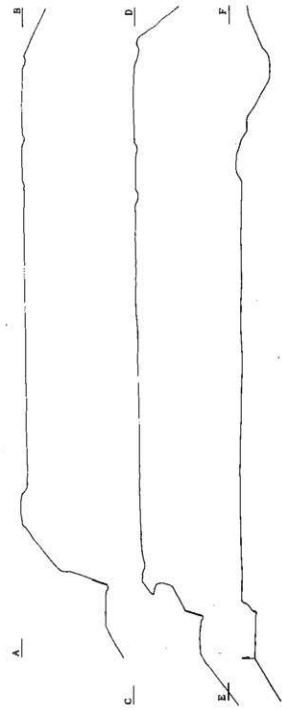
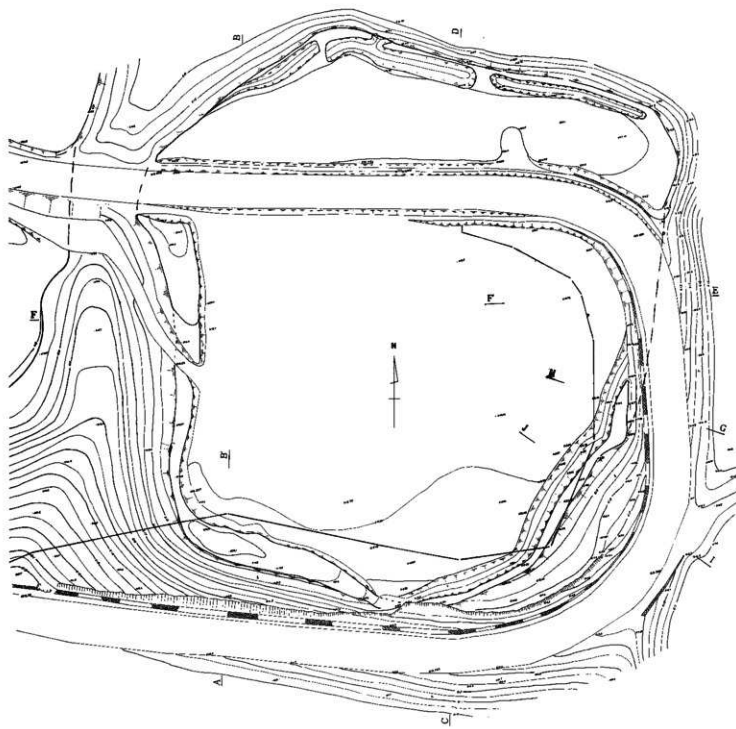
1. 赤須城 2. 古城 3. 荒城 4. 大田切城 5. 塩木城 6. 上穂城
 7. 大北城 8. 大城 9. 射殿場 10. 城山 11. 菅沼城 12. 古城
 13. 高見城 14. 中村城 15. 曾倉城 16. 原城 17. 稲村古城 18. 稲村城
 19. 避光城 20. 高田城 21. 大久保城 22. 城村城 23. 小城 24. 塩田城
 25. 青木城 26. 秋葉城



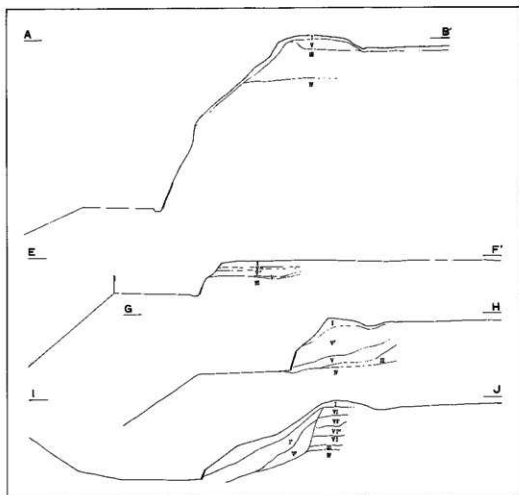
第3圖 永興橋附近地圖 (S = 1 : 3,000)



第4圖 赤須城第1次調査遺構概略図 (S = 1:1,000)

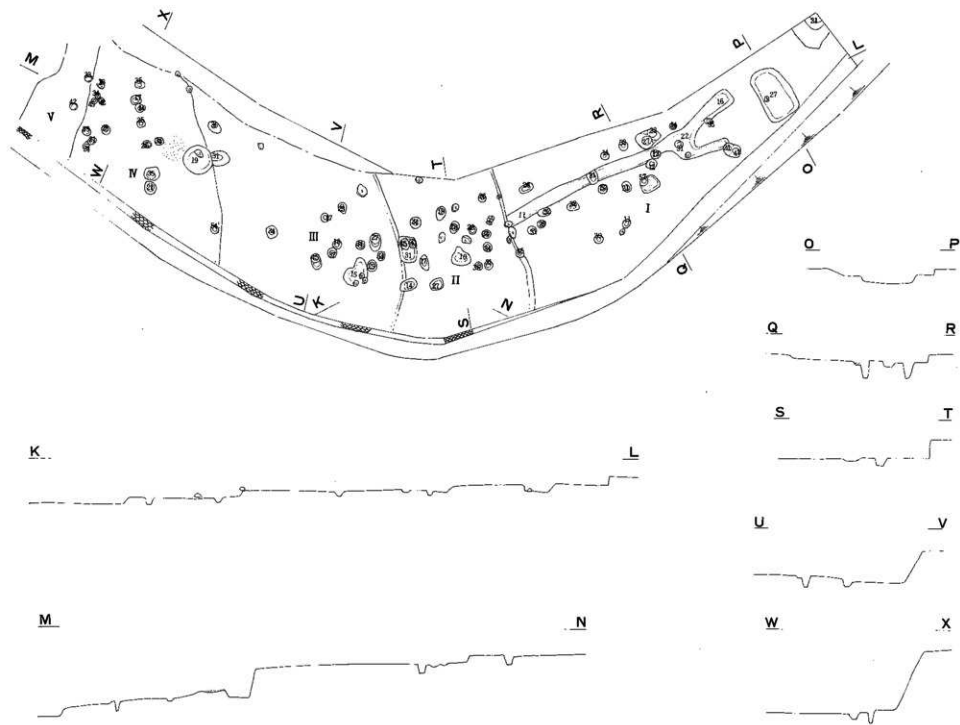


第5図 赤沼堤本郭跡測量図 (S = 1:400)
(水準レベルは620.00m)

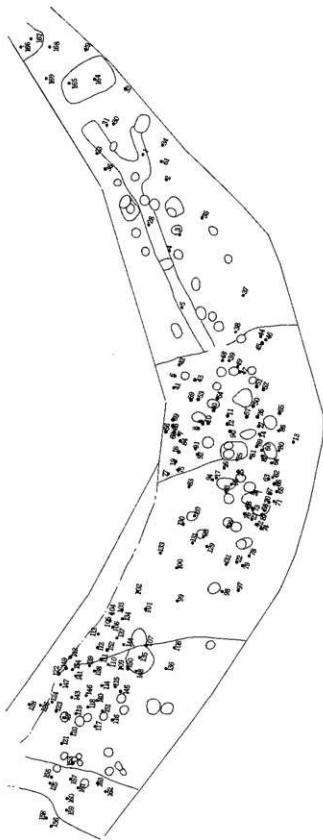


- I. 表土 黒褐色 粘性なし
- I'. 表土 黒褐色 (わずかにローム含む) 粘性なし
- II. 漸移層 暗褐色
- III. ローム層 黄褐色
- IV. 基盤礫層
- V. 黄褐色土 (ロームブロック多し) 粘性あり
- V'. 黄褐色土 (ロームブロックと灰・焼土を多く含む) 粘性なし
- V''. 黄褐色土 (ローム粒と灰・焼土を含む) 粘性なし
- VI. 暗褐色土 (ロームブロックわずかに含む) 粘性なし
- VI'. 暗褐色土 (ロームブロック多く含む) 粘性なし
- VI''. 暗褐色土 (ロームブロックしま状に入る) 粘性なし

第6図 赤須城跡本郭断面図 (S=1:200)
(水系レベルは620.00m)



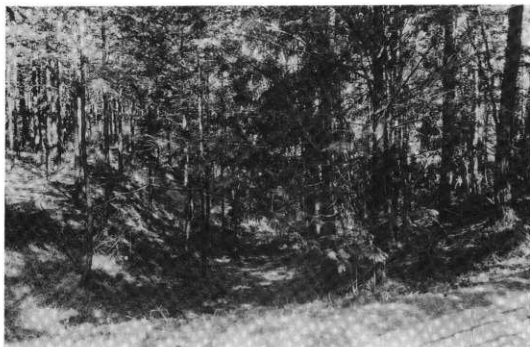
第7図 遺構実測図 (S = 1:120)
(水系レベル±620.00m)



第 8 図 遺物出土状況図 (S = 1:120)



赤須城外城・本郭（東より望む）



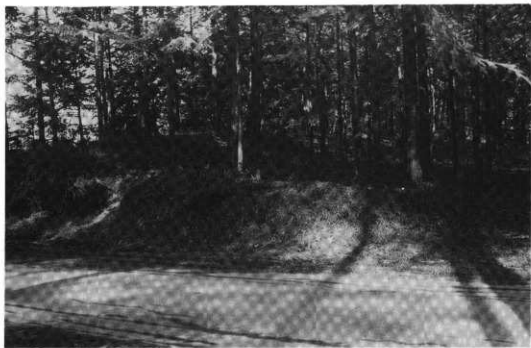
二の堀（北側）



本 郭 (東より)



室 屋 (北より)



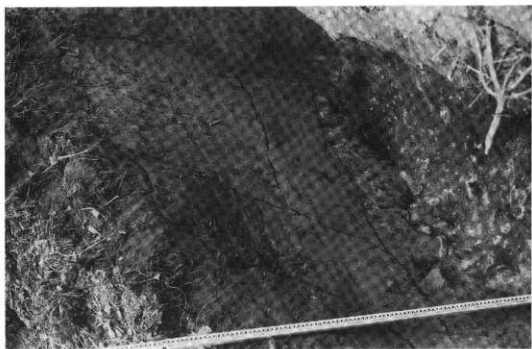
二の郭北側



一の堀と本郭南東部



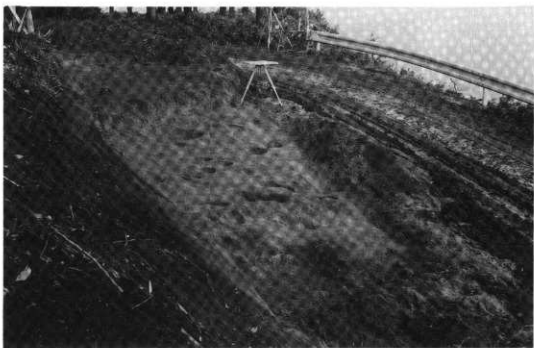
本郭南側土塁 (西より)



土層 (I-J)



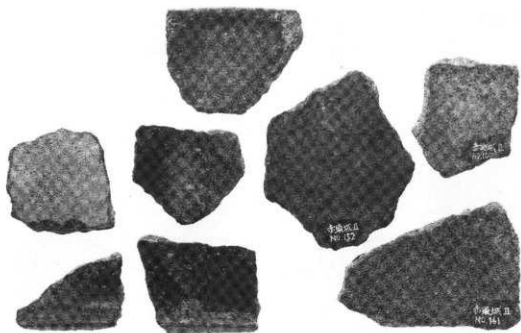
I・II面 (南より)



II~V面 (南より)

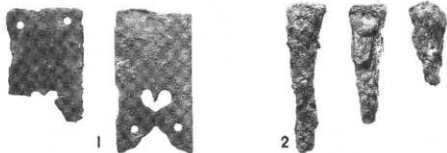


1

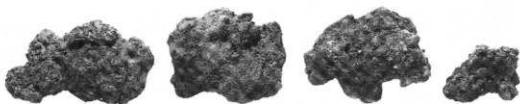


2

1. 手鏡 2. 内耳土器
(1:1.5) (1:1.5)



1



2

1-1. 銅製品 1-2. 釘 1-3. 刀子 (1:1) 2. 鉄さい (1:1)



1



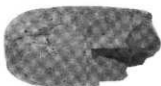
2



3



4



2

1-1. 石臼 2~4. 磁石 2. こも手石
(1:1) (1:1.5)

赤須城跡

(第 2 次)

——緊急発掘調査報告——

平成元年3月20日発行

編 集	駒ヶ根市上穂栄町23番1号市立博物館内 赤須城跡発掘調査団
発 行	駒ヶ根市赤須町20番1号 駒ヶ根市教育委員会
印 刷	駒ヶ根市上穂南3番12号 街宮沢印刷所